

国・地域別の取り組みと海外拠点の活動

国際交流基金では、政府の外交活動や国際情勢の変化を踏まえながら、国・地域別方針を策定しつつ事業を実施しています。また、21カ国に22の拠点を設けており、その国・地域の状況に合わせ、文化芸術から日本語教育、日本研究や知的交流の各分野でさまざまな交流活動を展開しています。



「日韓新時代：未来へのコラボレーション」の一環として韓国のメディアアーティストが共同制作した「ソウルスクウェア・メディアキャンパス」における真鍋大度氏の映像作品

2010年度 国・地域別の取り組みについて

2010年度においては、韓国における主要都市向け戦略的文化集中発信プロジェクト、アジア・大洋州地域との人物交流を促進する21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS Programme)、「日墨交流400周年」「トルコにおける日本年」をはじめとする大型周年事業への協力などの重点的事业を展開しました。

■主要都市向け戦略的文化集中発信プロジェクト

日本との外交関係上重要な国の主要都市で、現地の文化芸術機関等と協力しながら文化発信事業を集中的に展開し、日本人および現代日本社会のもつ価値や魅力を示し、対日理解の向上、深化をはかるプロジェクトです。2010年度は韓国で「日韓新時代：未来へのコラボレーション」を実施しました(P.15、P.35参照)。

■21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS Programme)
「21世紀東アジア青少年大交流計画プログラム(JENESYS Programme)」は、アジアの強固な連帯の基礎を強化するこ

とを目的として、2007年からの5年間で大規模な青少年交流事業を実施する事業です。対象はEAS(東アジア首脳会議)参加国(ASEAN、中国、韓国、インド、豪州、ニュージーランド)を中心とするアジア・大洋州の諸国。国際交流基金はこの事業の一翼を担い、2010年度は日本語教師や日本語学習者の招へい、若手知識人や実務家、若手の芸術家・デザイナーの招へい事業など、将来、各分野でリーダーとしての活躍が期待される人材の育成をめざした交流事業を行いました。

■大型周年事業への協力

2009年から2010年にかけて「日本メキシコ交流400周年」が、2010年には「トルコにおける日本年」が開催され、官民を挙げて数多くの文化交流事業が行われました。国際交流基金はこれらの周年事業に積極的に参加し幅広く日本文化を紹介しました。

アジア・大洋州 | ソウル日本文化センター

韓国の6都市を舞台に展開された 「日韓新時代：未来へのコラボレーション」

ソウル日本文化センターでは、文化を通じた新しい日韓関係の構築を目指して、展示、公演、映画、青少年教育、シンポジウムなど複合的なイベント「日韓新時代：未来へのコラボレーション」事業を、在大韓民国大使館との共催で2011年2月から3月、ソウルなど6都市で実施しました。

今回の企画は、日韓のさまざまな人びと・機関による共同作業や、伝統と現代、自然と科学技術、多文化共生、環境といった日韓共通課題の克服に向けた双方の取り組みに目を向け、各事業は両国の専門家や機関が連携・協力して実施されました。短期間に多くの事業を実施し、多くの来場者や共催団体の人びとと関わることができました。

■美術では、2000年以降の日本のマンガを主題とする「新次元マンガ表現の現在」展や、日本のプロダクト・デザインを多角的に概観する「WA：現代日本の調和の精神」展、ソウル中心部の巨大なビルの外壁に日韓メディアアーティストの共同制作作品が浮き上がる「ソウルスクウェア・メディアキャンパス・J-Kコラ



廃品打楽器演奏グループ「ティコボ」のライブ

ボレーション」など、同時代的で多彩な表現を紹介しました。舞台芸術では、伝統音楽分野で初の本格的な日韓コラボレーションとなった「日韓伝統歌舞楽祭」、在日の家族が逞しく生きる姿を描いた演劇「焼肉ドラゴン」公演、日韓の廃品打楽器演奏グループの協演が実現した「ティコボ韓国巡回公演」などを実施。映画の分野でも「われわれ！日韓映画祭」と題して日韓に関係の深い多様な映画を上映して新たな視点を提供しました。

さらに、日韓の大学生が共同で模擬会社を立ち上げ音楽イベントを行う、あらたなタイプの教育事業「日韓ブラストビート・プロジェクト」に加え、日韓の小説の互いの国での翻訳・出版状況を掘り下げた出版交流シンポジウムなど、文化のさまざまな様相を映し出す企画も実現しました。

事業期間中の3月11日に東日本大震災が発生しましたが、各イベントでは韓国の多くの人びとから被災者に対し温かい声援と支援が寄せられ、この事業が目指すものと、韓国の人びとの日本に対する眼差しが重なっていることが感じられました。

欧州 | パリ日本文化会館

パリ中心部の立地とホール施設を活用し 日本文化発信事業を実施

展示や講演会のほか、16万人の集客があるイベント「JAPAN EXPO」へのブース出展など行いました。

■2010年は、秋のハイライト事業として「近代日本工芸1900-1930—伝統と変革のはざまに」展を開催。明治、大正、昭和という3つの時代に渡る1900年から1930年の間に制作された優品74点を、陶芸、染織、漆工、金工を中心に紹介。この時代の工芸作品が海外でまとめて紹介される貴重な機会となりました。また、アングレーム国際漫画フェスティバルとの協力により、『ベルサイユのばら』作者の池田理代子氏を招へいして講演会を行い、たくさんの若い世代が来場しました。

大ホールでは、日本のコンテンポラリーダンスを代表するカンパニー Noism を招へいし、「Nina」公演を実施。3日間の公演はいずれも満席で、終演後は観客からの熱狂的なカーテンコールを受けました。他にも、津軽三味線の上妻宏光氏とジャズピアノの塩谷哲氏による異色デュオ AGA-SHIQ のコンサート、梅田宏明氏によるコンテンポラリーダンス公演などを実施しました。



パリ日本文化会館「近代日本工芸 1900-1930 伝統と変革のはざまに」展
Les arts decoratifs japonais face a la modernite / 1900-1930 撮影：C.-O. Meylan

2010年は映画事業を充実させた1年でもありました。年間8本の特集上映会を企画し、特に小栗康平監督特集、島津保次郎監督特集のふたつの特集はフランスで初の試みであり好評を得ました。また、国文学研究資料館の今西祐一郎館長による源氏物語に関する講演会、作家の夢枕獏氏によるトーク、渋沢・クロード賞の受賞者によるレクチャーなどを実施しました。

■パリ日本文化会館の活動は館内のみに留まりません。2010年は、日本のエンターテインメントの祭典として16万人以上の来場者を集める「第11回 JAPAN EXPO」展に、初めてブース出展しました。国際交流基金が開発した日本語学習サイトの紹介を中心に、日本語学習の魅力を発信しました。

■講演・シンポジウムでユニークな企画だったのは、「新幹線とTGVが存在しなかったら…高速鉄道がもたらす経済効果と社会的影響」と題されたシンポジウム。JRとSNCF（フランス国鉄）の関係者が集い、鉄道技術開発における共通点と相違点を浮き彫りにする機会となりました。

過去から未来へと続く 日本文化を 多角度から紹介



ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展の総合ディレクター、妹島和世氏の講演会

現代に受け継がれ、生み出されて行く日本文化を多様な切り口で紹介し、注目度の高いイベントを展開しました。

■松竹大歌舞伎ローマ公演を控えた中村芝雀文氏による歌舞伎講演会では、伝統芸能への根強い人気を反映し多くの聴衆が来場したほか、ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展で初の女性総合ディレクターとなった妹島和世氏を招いた講演会では超満員の観客が熱心に耳を傾けました。その他、三味線とピアノのデュオAGA-SHIO、ユニットSalle Gaveauなどの公演や、増村保造監督特集などの映画上映、「キャラクター大国、ニッポン」展など多彩な事業を展開しました。

■日本語講座では、平日午前に入門コースを、またドラマやマンガなどテーマ毎に日本語に親しむ「楽しく学ぶ日本語・日本文化短期コース」を新設。日本人ボランティアと学習者の会話会「わいわい・しゃべりあーも」も恒例となり、開催は10回を数えました。日本語能力試験はローマ、ミラノのほか新たにヴェネチアでも開催され、711名が新試験に臨みました。

万博会場ほか 中国各地で 多彩なイベントを展開



「J-pop in China2011」より、日本の男性R&Bシンガー、JAY'EDのライブ

本年度是北京、上海のみならず、地方都市でも積極的に事業を展開しました。

■万博に沸く上海で、アニメキャラクターと建築に関する2つの展覧会や邦楽公演、ドキュメンタリー映画祭への作品出品を行ったほか、北京・青島では『世界の中心で愛をさけぶ』の著者である片山恭一氏の講演会を、また南京ではamin氏、河口恭吾氏、城南海氏による「心連心コンサート」を実施しました。さらに、7月の中国人個人観光ビザ発給拡大を踏まえ、日本の多様な地方文化を紹介する目的で、地方自治体事務所等の協力を得て、「都道府県紹介講演会シリーズ」を実施。現地を熟知した自治体職員による実演を交えた講演は一般市民のあいだで大好評でした。

■7月に新試験が始まった日本語能力試験で、中国では出願者数が28万人を超えました。また全国の高校、大学の日本語教師を対象にした集中研修会を北京、上海、貴陽などで開催し、330人以上が参加しました。

出版の街ライブチヒで 日本のブックデザイン を紹介



日本の優れたデザインの書籍に見入る来場者

本年度も多くの事業を行いました。なかでもライブチヒで開催した「現代日本ブックデザイン」展は好評を博しました。

■ライブチヒは国際図書見本市が有名で、「文庫本」のフォーマットはライブチヒの「レクラム文庫」から発展したといわれる出版の街。同地の印刷博物館で開催された「現代日本ブックデザイン」展では、文学、実用書、マンガ/ポップカルチャーなどの8分野の優れた装丁の本100点を展示しました。オープニングは雨にもかかわらず200人近い人が集まりました。外国での書籍展というと「言葉が前提だから」と敬遠されがちですが、日本のブックデザインや高度な印刷技術は賛嘆的でした。また、書道のデモンストレーションや子どもから大人まで楽しめる日本の活版印刷体験ワークショップなどのイベントも盛り上がりました。今回、いわゆる「日本好き」ではないタイプの来場者も多く、今後も日本文化を新たな切り口で紹介することで、これまで日本に関心のない人にも日本文化に触れてもらえるよう努めていきたいと思っています。

日本とインドネシアの 戯曲競演で 文化交流の意義を探る



日本の作家による戯曲がインドネシアの俳優によってリーディング上演された

インドネシア社会が抱えるさまざまな問題に対して、日本とインドネシアの劇作家の戯曲を競演することで文化のもつ力や意義を再考する場を提供しました。

■2010年11月「インドネシアのリアリズム演劇を見直す」をテーマに、インドネシア・ドラマティック・リーディング・フェスティバルがジャカルタ日本文化センターのホールで開催されました。これは2009年12月に東京で開催された「アジア劇作家会議09」に参加したジョネッド・スリャトモコ氏が、同会議の果たす役割・機能に感銘を受け、インドネシアの代表的な劇団に参加を呼びかけて実現したもので、坂手洋二『屋根裏』、鄭義信『杏仁豆腐のココロ』(以上、日本)、ラエタ・プリゾン・ブコイ『ドクター・レスレクション：町を治療します』(フィリピン)の3作品が初めてインドネシア語でリーディング上演されたほか、インドネシア語戯曲も古典と新作あわせて3本が上演されました。また、インドネシアの演劇関係者が一堂に会してのディスカッションも行われ、日本からは坂手洋二氏が参加しました。

アジア・大洋州 | **バンコク日本文化センター**

タイ国内の映画祭に 5千名を集客 周辺国でも 日本文化を紹介



黒澤明監督生誕100周年記念映画祭でのトークイベント

文化芸術面の交流をはじめ各種イベントを開催しました。

■「黒澤明監督生誕100周年記念映画祭」では、25作品を一挙上映しました。メディアにも大きく取り上げられ、約5千名の来場者が巨匠の作品に触れました。また「現代日本の工芸」展や、現代演劇公演、タイボグラフィー国際シンポジウム等を通じて、先鋭的で「カッコいい」日本のイメージ発信に努めました。日本文化紹介事業の比較的少ない地域にも力を入れ、東北部、南部で和楽器演奏、映画上映、折り紙事業をシリーズ化したほか、隣接するラオス、カンボジアでは生け花を紹介し、ミャンマーではパントマイム公演で1,500人を超える観客を笑いの渦に巻き込みました。

■日本語教育では、中学・高校生を対象としたオリジナル教材『こはるといっしょに ひらがなわあーい』を出版しました。

■チェンマイで開催した「第4回タイ国日本研究ネットワーク年次総会」では、応募論文、発表論文、参加者のすべてが過去最多に。また、「地元学」をテーマとしたセミナー等も実施しました。

アジア・大洋州 | **クアラルンプール日本文化センター**

在マレーシア日本人 との日本語を通じた 交流活性化の試み開始



マレーシアの日本語教師のためのセミナー

マレーシアでの拠点設置から20年以上が経過し、引き続き文化交流を活性化させ、日本理解と対日関心向上を図っています。

■伝統文化から現代文化、生活文化まで多様な事業を展開。都市部に限らず地方でも事業展開をはかりました。「和太鼓倭公演」では収容人数を大幅に超える2,800名を動員。「吉田兄弟ライブ」は全公演完売、メディアの取り上げも大きく話題となりました。また、招へい事業で訪日した若手クリエイターの活動成果展をショッピングモールで実施。多数の市民の目に触れました。

■マレーシアでは定年退職後に長期滞在する日本人が増加していますが、こうした人達とマレーシア人との交流促進と日本語教育の裾野拡大の両方を目指し、日本人向け日本語教授法入門講座を開講しました。また中等教育における日本語教育の拡大に対応し、各種支援や、日本語講座の拡充なども実施しました。

■研究者のネットワーク強化を図り、北東アジアの経済連携とASEANへの影響をテーマに実施したセミナーでは、日本人専門家を迎え、国内3カ所を巡回、500人以上が参加しました。

アジア・大洋州 | **マニラ日本文化センター**

高校生向けの 新しい日本語教材 『enTree』開発



日本語教育促進のためのイベント「2011 NIHONGO FIESTA」

フィリピン教育省は、2009年に日本語を含む外国語を選択科目として高校のカリキュラムに導入する試みを開始。マニラ日本文化センターはこの動きに合わせた日本語教育事業を展開しました。

■日本語学習をきっかけに、異なる言語や文化に対する好奇心を養い、コミュニケーション能力、問題解決能力といった自己実現力を育むことに重点を置いた教材『enTree - Halina! Be a NIHONGOJIN!!』を開発しました。この教材は、世界中で日本語を学ぶ同世代の若者と交流するための日本語や、日本や世界の国ぐにの文化を学びながら、それらの国と、フィリピンとの共通点や相違点を考えることで、異文化への理解やフィリピンの価値を再発見できるよう方向づけられています。教材を手にしたマニラ市にあるトレス高校のエドワード・タン先生は「子どもたちに文化的に寛容であることの大切さを教えることができる。自分なりにアレンジして教えていきたい」と感想を寄せてくれました。今後フィリピン各地の高校に日本語の輪が広がることを期待しています。

アジア・大洋州 | **ニューデリー日本文化センター**

コンテンポラリーな 表現から 日本への関心を喚起



ダンサー田中泯氏によるパフォーマンス

舞踊が盛んなインドでダンスパフォーマンスを通じた交流を行いました。インドでは欧米諸国の最新情報が届きやすい一方、日本の現代的な文化表現に触れる機会はまだまだ少なく、好評を博しました。

■高橋アキ氏（ピアニスト）と田中泯氏（ダンサー）によるパフォーマンスを、National School of Drama(NSD)との共催で2011年1月に開催。田中氏は過去にもNSDから招へいを受けており、NSD敷地内で定員100名程度のスペースで行なわれたパフォーマンスには、氏の訪印を心待ちにしていた学生、演劇ファンら200名以上が参集。「見たことの無いパフォーマンス」「日本のコンテンポラリーダンスをもっと知りたい」といった声が聞かれました。後日開催されたニューデリー日本文化センターでのパフォーマンスには、舞台芸術関係者のみならずデリー在住の外国人など多様な人達が集まり、今回のパフォーマンスを通じてセンターを知った人や、日本のコンテンポラリーダンスに興味をわき、より詳しい情報を求める人のようすから、日本との接点が少なかった人達の間に関心を植えつけられたことを実感できました。

日本映画祭に 過去最高の 1万4千人を動員



日本映画祭でのパネルディスカッション

好例の日本映画祭の他、アニメイベントへの出展を行いました。
 ■今年度で第14回を迎え、毎年恒例となった日本映画祭は、6都市（シドニー、メルボルン、キャンベラ、パース、ブリスベン、ホバート）を巡回し、過去最大の合計約1万4千人を動員。なかでも、のべ36本が上映されたシドニーおよびメルボルンの2都市では合計1万2千人が集まりました。シドニー会場では、ゲストに国際交流基金賞受賞者の映画評論家で日本映画大学学長の佐藤忠男氏、『京都太秦物語』の阿部勉監督、『東京マープルチョコチョコレート』の塩谷直義監督を招き、『おとうと』『告白』など話題作を上映しました。また同時に学生フォーラム、アニメ特集など、多彩なイベントを組み合わせて実施しました。今年度は協賛・協力が25団体に増加したことから、映画祭への期待は年々高まっているようです。

また、若者が数千人規模で集う、オーストラリアのアニメイベント「SMASH!」「ANIMANIA」へ初出展。若い世代へのアピールが功を奏し、メールマガジン登録者が一気に増えるなど、新しいファンを獲得することができました。

伝統文化、芸術、食… 広い関心に応じて 多様な事業を実施



シネマ歌舞伎が上映されたバンクーバーの映画館

日本への幅広い関心を持つカナダの人々。今年度も日本文化を核とする交流事業を広くカナダ全土に展開しました。

■文化事業では、バンクーバーなど各地映画祭への支援、11都市での映画上映、バンクーバーで初のシネマ歌舞伎の上映、5都市を巡った日本人演奏家によるクラシック音楽公演、「現代日本写真」展、「手ぬぐい」展等の展覧会、日加作家の文学対話事業、センター図書館を通じた日本文化やポップカルチャーの紹介等、多様な分野を紹介する事業を行ないました。

■日本語教育では、カナダ日本語教育振興会や各地の日本語弁論大会を支援し、3都市で日本語能力試験を実施。アルバータ州教育省に派遣中の日本語専門家と連携し、研修会や情報提供、調査や日本語教育導入促進活動などを実施しました。

■日本研究や知的交流の分野では、カナダ日本研究学会への支援、「日加韓社会政策シンポジウム」、震災直後の日本の現状を発信するシンポジウム、ウォータールー大学の日本研究センター設立準備会議への支援など、幅広く支援を行いました。

日・ベトナムの アニメファンと コスプレイヤーが競演



「Active Expo2010」に集まった日・ベトナムのコスプレイヤー達

ベトナムは、国民の半数以上が30歳以下という若者大国です。ベトナム日本文化交流センターでは、こうした特殊な環境に合わせ、ポップカルチャーを中心に多種多様な分野の事業を展開しました。

■ベトナムのアニメ・マンガファンが主催する「Active Expo2010」に、日本から世界コスプレサミット優勝者である因幡優里☆YuRiさん等を招へい。日本人としては初めて、コスプレコンテストの審査員を務めてもらい、「本場」日本のパフォーマンスを披露してもらいました。日本人とベトナム人コスプレイヤーによるダンスも、少ないリハーサル時間にも関わらず息はぴったり。2千人以上の観客に大好評でした。また、日本アニメーション映画祭では、チケット配布初日から千人以上が長蛇の列をつくるほどの反響のなか、原恵一監督『カラフル』から宮崎駿監督『千と千尋の神隠し』まで8本のアニメを上映。関連事業として、海外でも人気の声優・斎賀みつきさんのトーク&ミニライブを実施。声優の仕事の魅力を歌とトークで紹介しました。

日本理解と 日米関係を深める 各種事業への支援と 研修・派遣を実施



奈良美智展の会場 Asia Society Museum
撮影: Elsa Ruiz

多様な文化を複合的に紹介し、日本理解と日米関係深化を図るため、プログラム支援や研修、派遣事業などを行いました。

■本年開催された日本紹介イベント「Japan-NYC」（主催：カーネギーホール）では、奈良美智展や日本の女優を特集した映画祭を支援しました。またNY市立博物館で行われた、日本初の公式遣米使節団派遣（万延元年）から、2010年が150年目であることを記念した展示会を支援しました。主催事業としては米国で活躍する日本人アーティストを中南米に派遣する事業で、4つのグループを9カ国13都市に派遣しました。

■気候変動や移民問題など世界が直面する多様な課題を扱う日米共同研究事業への支援とともに、日米関係を担う次世代リーダーの育成を目的に、中堅・若手日本専門家を対象とした「日米次世代パブリック・インテリクチュアル・ネットワーク・プログラム」、国際関係論およびジャーナリズムを学ぶ米国大学院生を対象とした2件の訪日研修を実施しました。さらに草の根レベルでの対日理解を促進する助成事業も実施しました。

米州 | **ロサンゼルス日本文化センター**

日系企業の集まる 西海岸ならではの 事業を開催



ドロッカー研究所のリック・ワーツマン所長の講演

全米を対象とした日本語教育事業をはじめ、さまざまな事業を展開していますが、今年は南カリフォルニア日系企業協会（JBA）とともに多くの事業を展開しました。

■JBAは2011年創立50周年を迎え、記念行事に作曲家・ピアニストの加古隆氏を迎え、リサイタルを共催しました。氏の奏でる美しい旋律に、同行事のテーマである、企業から地域コミュニティへの感謝の気持ちが伝わるイベントとなりました。

■米国8都市での2年にわたる調査結果が「米国における日系企業の社会貢献活動についての調査報告書」として2010年5月に発行され、その報告会をロサンゼルス日本文化センターで11月に開催しました。通称「もしドラ」で話題となったピーター・ドロッカー博士の名を冠したクレアモント大学院大学ドロッカー研究所からリック・ワーツマン所長を招き行われた講演では、「企業による社会貢献活動は、マネジメントの重要な戦略と位置づけられるべき」との興味深い内容に、聴講した企業関係者も大いに関心を寄せていました。

米州 | **サンパウロ日本文化センター**

日本料理の神髄 京料理の味と芸術性、 緻密さに感嘆の声



京料理を紹介するデモンストレーション

ブラジルには数多くの日本料理店があり、寿司などに代表される日本食が大いに注目されています。サンパウロ日本文化センターではその状況を踏まえ、2010年度は食をテーマとしたイベントを多数開催しました。

■京都の老舗料亭からふたりの料理人を招き、ブラジルとサンパウロで本場の京料理を紹介をするイベントを実施しました。ブラジルでは、ブラジルの食材を使った京料理をブラジル政府関係者や、料理を扱うマスコミ関係者に試食してもらったところ、「味はもちろん、一皿一皿がまるで芸術作品のようで、これまで経験した日本食とは別格」という感想が聞かれました。

サンパウロでは、一般市民を対象に「日本料理における野菜の下処理」「日本料理における“だし”の必要性」についてレクチャー、デモンストレーションを行いました。季節や温度、素材など、準備の段階から緻密に計算されているようすに、参加者から感嘆の声があがり、日本人の「おもてなしの心」を味わっていただくことができました。

米州 | **メキシコ日本文化センター**

交流400年記念に 22年ぶりの 歌舞伎舞踊公演



「鶯娘」の舞台より

日本メキシコ交流400周年を記念する大型文化事業として、モンテレイ市とメキシコ市で歌舞伎公演を実施しました。

■モンテレイ市では初めて、メキシコ市では1988年以来22年ぶりの歌舞伎公演となりました。中村京蔵、中村又之助、市川喜之助各氏に加え、長唄、三味線、鳴物をはじめとするスタッフ総勢19名がメキシコ入り。「鶯娘」と、「石橋（しゃっきょう）」が披露され、観客は、ときに静かで優美、ときに激しく勇壮な歌舞伎舞踊の真髄を堪能しました。また、初めて歌舞伎に触れる観客が公演をさらに楽しめるように、歌舞伎の歴史、音楽、女形のしぐさ、立役の扮装（化粧・衣装）についてのユーモアあふれる解説・実演が加えられました。中村京蔵氏とともに女形になって泣いたり、中村又之助氏と一緒に見得を切ってみたり、来場者も参加できる楽しいレクチャーは多くの観客の印象に強く残ったことでしょう。

欧州 | **ロンドン日本文化センター**

演劇文化の本拠地 ロンドンならではの 深みのある事業を展開



日本の演劇作品をイギリス人俳優がリーディング

日本への関心を高めてもらうことを目指し、英国全土でパートナー機関との連携企画や自主企画を実施しています。

■ロンドン日本文化センターが行う文化芸術に関わる事業は、毎日が挑戦の連続です。多様な文化背景を持つ英国の人びとの関心とうまくマッチングするよう、美術、演劇、映画などの分野、伝統と現代、アーティストの個性など、さまざまな要素を考慮して企画しています。演劇分野で深い歴史をもつ当地では、日本演劇作品にふれた経験のある演劇関係者も多く、80年代以降の日本の劇作家や作品を系統立てて紹介した扇田昭彦氏による現代演劇のレクチャーが好評を博しました。また、作家・演出家の坂手洋二氏、長塚圭史氏を招き、トークショーとともに英国人演出家と役者によるドラマリーディングを実施。作品の普遍性や固有性を追求するふたりの手法が、さまざまな議論を巻き起こしました。助成事業としては、地方を巡回したパペットによる「浦島太郎」の公演や、65人の被爆者の肖像画展等をはじめとするさまざまな事業を支援しました。

開所の初年度から 日本—スペインの 文化交流を 積極的に推進



金剛永謙の演じる能楽「雪」より
撮影：Paco Manzano

マドリード日本文化センターはマドリード市との協定に基づき2010年4月に開設され、日西文化交流の中核機関として、文化芸術ほか日本研究講演会等、多岐にわたる事業を実施しました。

■開所初年度の大規模な事業として、金剛流能楽公演をマドリード、バルセロナ、リスボンで実施したほか、レナード衛藤 Blendrums (和太鼓、タップダンス、サクスのユニット) を招へいし、マドリード市の「白夜祭」、バルセロナの「アジア・フェスティバル」をはじめ、各地で公演を実施。日本の伝統楽器と現代楽器のフュージョンによる新しい音楽の世界を紹介するこの事業は、マドリード市やバルセロナ市などの自治体やカサ・アジアとの協力関係を深めるきっかけともなりました。また、東日本大震災後の2011年3月には、マドリード市とカサ・アジアが実施した被災地支援イベント「日本のための千羽鶴」にも協力しました。

■2010年9月には、日本語教育専門家による研修や教育相談などを開始するとともに、日本語教材やマンガやアニメに関する書籍を中心とする図書室を開館しました。

コンクール大好き! ロシアや海外の 「俳人」や子どもたち が腕くらべ



子供絵画コンクールに寄せられた作品

開設から3年目を迎え、活動も軌道にのった2010年度は、ふたつのコンクールを実施し、大成功を収めました。俳句コンクールと子ども絵画コンクールです。

■詩を愛するお国柄のロシアでは、誕生日などのお祝いに自作の詩をプレゼントすることが珍しくありません。俳句に対する関心も高く、すでに多くの「俳人」がいます。ロシア国内のみならず、俳句コンクールには、旧ソ連の国、ヨーロッパ、アメリカ、そして台湾、日本からも秀作3,100句が集まりました。また、雑誌「民話」と協力して実施した子ども絵画コンクールも、予想以上の反響を呼びました。俳句と同様、イスラエル、ウクライナ、ベラルーシなど海外からも応募があり、3,366点の力作が集まりました。どれも子どもたちからの日本に対する暖かい思いが感じられる作品ばかりで、全作品をウェブサイトに掲載しました。教育者の間でも関心は高く、学校や絵画サークルから団体としての応募もありました。コンクールは子どもたちだけでなく、指導者にとっても力の見せ所なのです。

若い世代を対象に 興味を喚起する イベントを 重点的に実施



「キャラクター大国、ニッポン」展より

親日的な風土を持つハンガリーでは、以前から日本の伝統文化の認知度が高く、人気を誇ってきましたが、2010年度は、将来の日本とハンガリーの交流を担う次世代の若者層のあいだでの関心拡大を目標に、現代日本文化やポップカルチャーをテーマとする多様な事業を積極的に行いました。

■なかでも高い関心を集めた事業が、ハンガリー貿易観光博物館との共催によりブダペストで実施した「キャラクター大国、ニッポン」展です。日本社会でブームをまき起こした国民的キャラクターの世界を、幅広く紹介するこの展覧会は大きな話題を呼び、予想を大きく上回る来場者を得たほか、ハンガリーの主要なメディアでも数多く取り上げられました。その他にも、「次世代」を対象として、元文部科学省留学生による現代日本のファッションをテーマとした講演会や、日本のサブカルチャーに関する著作を多く持つ写真家・編集者の都築響一氏による講演会等、日本文化の多様な側面を知ってもらうための事業を企画・実施しました。

映像を通して 「ヒロシマ」 そして反核、 非戦の思いを伝える



地元メディアのインタビューに答える田邊雅章氏

2010年度は、広島への原爆投下をテーマにした映画祭「ヒロシマ」を開催。映画を中心にさまざまな交流を行いました。

■映画祭では『はだしのゲン』『原爆の子』『夕凧の街、桜の国』『父と暮らせば』『黒い雨』『鏡の女たち』の6作品を上映。日本映画のファン層を超え、広くエジプト市民の注目を集めました。また映像制作者で、被爆者でもある田邊雅章氏を広島より招き、講演と、同氏が制作した原爆投下前のヒロシマの町並みをCGで再現した映像作品を紹介しました。史実としての原爆に関する理解を促進するだけでなく、映画上映や講演会を通じ、原爆がもたらした影響を多様な視点、主体から紹介する機会となり、日本の反核・非戦への思いについても、理解と共感を得られたと思います。また、舞台芸術では、日本・トルコ共同制作音楽公演「Sound Migration」、日本・タイ・マレーシアの混成メンバーからなる「Unit Asia ジャズ公演」など、新しい芸術表現を模索して、国境を越えてアジアとコラボレートする日本の創造活動を積極的に紹介しました。